

いつものように香子が彰子に勉強を教えていると、そこへ一条天皇がやつてきて、言いました。「紫式部殿は、歴史を良く知っているようですね。きっと漢文もお読みになるのでしよう。なんて、頭の良い女性だ。」

一条天皇に褒められて、香子は喜びました。この時代、歴史の本には漢文が使われていました。香子は漢字が読めたので、歴史の本をたくさん読むことができたのです。ところが、宮廷の貴族たちは、天皇の言葉を聞いて、とても驚きました。そして、「紫式部は、女のくせに漢文を読んでいる。」などと香子の悪口を言うようになつたのです。

香子はとても傷つきました。そして、昔、父に「男だつたら」と言われたことを思い出しました。男だつたら、漢文を読んでも悪口は言われなかつたでしよう。

「なぜ、私は男に生まれなかつたのだろう。」

香子は、悲しみで涙を流しました。そして、

「これからは、一度と漢文は読まない。たとえ一の字でも、漢字は絶対に使わない。」と、心に決めました。そして、父からもらつた漢文の本をすべて捨ててしまいました。

